

水稻病虫害防除対策（7月）

1 斑点米カメムシ類

（出穂期前）

- （1）イネ科雑草は、カメムシの重要な発生源となります。イネ科雑草が出穂する前に畦畔や周辺の除草を徹底し、カメムシの密度を抑制しましょう。
- （2）水稻の出穂以降の畦畔除草は、カメムシを水田に追い込むことになるので、畦畔除草は出穂 10 日前までに終わらせましょう。
- （2）イネ科雑草やイヌホタルイ等のカヤツリグサ科雑草の穂は、主要加害種であるアカスジカスミカメの産卵場所となるため、水田内の雑草管理を徹底してください。

2 いもち病

- （1）病虫害防除所ホームページ（<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>）では、6月から8月までBLASTAM（ブラスタム）による葉いもち感染好適条件の出現状況を掲載しています。感染好適条件が広範囲で断続的に出現が認められると、その7～10日後に葉いもちが地域内にある多くのほ場で確認される全般発生開始期となり、例年は7月上旬に認められます。
- （2）葉いもちは、感染好適条件の出現時に感染しやすく、感染後7～10日後に病斑が認められるため、7～10日間隔で感染好適条件が出現した地域では、葉いもちの多発生に注意してください。
- （3）葉いもちの発生が認められる場合は、穂いもちへの伸展を防ぐため、早急に茎葉散布剤による防除を実施してください（表1、3）。
- （4）水面施用剤による穂いもち防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表2）。
- （5）散布剤による穂いもち防除を実施する場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に実施してください（表1、3）。その後、多発するおそれがある場合は、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- （6）薬剤防除の実施に当たっては、以下のことに注意してください。
 - ア 耐性菌の出現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用はさけてください。特にQoI剤（FRACコード:11）は、県内でも耐性菌の発生が確認されています。QoI剤の使用は、育苗箱施用薬剤を含めて年1回までとしてください。
 - イ 水面施用剤は、湛水状態にして所定量を均一に施用してください。施用後は7日以上止水状態を保ち、落水や掛け流しは行わないでください。
 - ウ アミスターエイトは、リンゴの一部品種に葉害を発生させることがあるため、リンゴにかからないよう注意してください。
 - エ パック剤やジャンボ剤は、藻や浮草で拡散が阻害される場合は使用をさけてください。

表1 いもち病（葉いもち、穂いもち）の防除薬剤（茎葉散布剤）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、 10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
アミスターエイト	アゾキシストロビン	11	収穫 14 日前まで	1,000～1,500 倍	3 回以内	散布
カスミン液剤	カスガマイシン	24	穂揃期まで	1,000 倍	2 回以内	散布
ノンプラス粉剤 D L	トリシクラゾール	16.1	収穫 7 日前まで	3～4 kg	2 回以内	散布
	フェリムゾン	U14				
ノンプラスフロアブル	トリシクラゾール	16.1	収穫 7 日前まで	1,000 倍	2 回以内	散布
	フェリムゾン	U14				
フジワシ乳剤	イソプロチオラン	6	収穫 14 日前まで	1,000 倍	2 回以内	散布
ブラシン粉剤 D L	フェリムゾン	U14	収穫 7 日前まで	3～4 kg	2 回以内	散布
	フサライド	16.1				
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫 7 日前まで	1,000 倍	2 回以内	散布
	フサライド	16.1				

注1) 液剤、乳剤、フロアブル剤は 10a 当たり 140～150L 散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表2 穂いもちの防除薬剤（水面施用剤）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
コラトップ粒剤 5	ピロキロン	16.1	出穂 15～10 日前	3～4 kg	2 回以内	散布
コラトップ 1 キロ粒剤 1 2	ピロキロン	16.1	出穂 15～10 日前	1～1.5kg	2 回以内	散布
コラトップ ジャンボ P	ピロキロン	16.1	出穂 15～10 日前	小包装（パック） 10～13 個 (500～650g)	2 回以内	水田に小包装（パック）のまま 投げ入れる。
フジワシ粒剤	イソプロチオラン	6	出穂 10～30 日前 (収穫 30 日前まで)	3～5 kg	2 回以内	湛水散布

注1) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注2) 試験研究の成果等に基づき、効果的な使用方法として使用条件を限定した部分には下線を付した。

表3 いもち病（葉いもち、穂いもち）の防除薬剤（無人航空機散布）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、 10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
アミスターエイト*	アゾキシストロビン	11	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	3 回以内	無人航空機 による散布
フジワシ乳剤	イソプロチオラン	6	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内	無人航空機 による散布
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫 7 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内	無人航空機 による散布
	フサライド	16.1				
ノンプラスバリダ フロアブル*	トリシクラゾール	16.1	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内	無人ヘリコプター による散布
	バリダマイシン	U18				
	フェリムゾン	U14				
オリゼメート粒剤 20	プロベナゾール	P02	収穫 14 日前まで	1 kg	2 回以内	無人航空機 による散布
コラトップ粒剤 24	ピロキロン	16.1	出穂 30～5 日前	0.5 kg	2 回以内	無人航空機 による散布
コラトップ 1 キロ粒剤 1 2	ピロキロン	16.1	出穂 30～5 日前	1 kg	2 回以内	無人航空機 による散布

注1) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注2) *は紋枯病との同時防除に使用できる薬剤を表す。

3 紋枯病

- (1) 本病は、前年に病斑上に形成された菌核が地表に落下、越冬して第一次伝染源になるため、昨年発生が多かったほ場や風下の畦畔沿いに発生しやすい病害です。
- (2) 幼穂形成期頃に水際の葉鞘に発病し、上位葉鞘に病斑が伸展します。
- (3) 密植や窒素成分の多いほ場では、発病しやすくなります。
- (4) 高温多湿が続くと上位葉鞘への伸展が激しくなり、第3葉鞘以上の葉鞘に発病して葉が枯れると減収等に結びつきます。また、茎が弱くなるため倒伏しやすくなります。
- (5) 出穂後も高温多湿が続く場合は、止葉葉鞘に伸展し、穂が枯れるおそれがあります。
- (6) 水面施用剤による防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表4）。
- (7) 散布剤による防除は、上位葉鞘へ伸展する前の穂ばらみ期に実施してください。その後、多発するおそれがある場合は、穂揃期に追加散布を行ってください（表4）。
- (8) アミスターエイトは、リンゴの一部品種に薬害を発生させることがあるため、リンゴにかからないよう注意してください。

表4 紋枯病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	FRACコード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり 使用量	本剤の 使用回数	使用方法
水面 施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	3	出穂 28～14 日前	3～4 kg	2回以内	湛水散布
	リンバー粒剤	フラメトピル	7	出穂 30～10 日前	3～4 kg	2回以内	散布
散布剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	11	収穫 14 日前まで	1,000～1,500 倍	3回以内	散布
	バリダシン液剤 5	バリダマイシン	U18	収穫 14 日前まで	1,000 倍	5回以内	散布
	モンカットファイン 粉 剤 2 0 D L	フルトラニル	7	収穫 14 日前まで	3～4 kg	4回以内	散布

注1) 液剤、フロアブル剤は 10a 当たり 140～150L 散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注3) 試験研究の成果等に基づき、効果的な使用方法として使用条件を限定した部分には下線を付した。

4 稲こうじ病

- (1) 本病は、穂ばらみ期に低温、降雨が多い場合や窒素過多のほ場で発生しやすい病害です。
- (2) 常発ほ場では、土壤中に原因菌が常在しており、田植後早い段階からイネの植物体に侵入し、穂ばらみ期に降雨や日照不足などの発生を助長する条件が揃うと発病します。天候予報などで穂ばらみ期に降雨が予想される場合は、出穂前に薬剤防除を実施してください（表5）。
- (3) 銅を含む薬剤は、葉が濡れている場合は薬害を生じやすいため注意してください。また、銅を含む薬剤を散布する場合は、出穂 10 日前までに施用してください。

表5 稲こうじ病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	FRACコード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり 使用量	本剤の 使用回数	使用方法
水面 施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	3	出穂 21～14 日前	3～4 kg	2回以内	湛水散布
散布剤	Z ボ ル ド ー 粉 剤 D L	銅	M01	出穂 20～10 日前	3～4 kg	—	散布

注1) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注2) 試験研究の成果等に基づき、効果的な使用方法として使用条件を限定した部分には下線を付した。

5 イネアオムシ（フタオビコヤガ）

- (1) 本種は、多化性で、本県では例年7月下旬と8月下旬に発蛾最盛期になっており、その10日後頃から幼虫の被害が目立ってきます。特に、穂ばらみ期から出穂期にかけて幼虫の被害が大きくなり、止葉が食害されることもあります。
- (2) 窒素過多による過繁茂なほ場、幼虫期に曇雨天が多い年、山間地など風通しの悪い地域などでは発生が多くなりやすいので、注意してください。
- (3) 薬剤防除は、7月下旬～8月中旬にかすり状の食害が確認されたら行ってください（表6）。

表6 イネアオムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、 10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	2,000～4,000 倍	2 回以内	散布

注1) 乳剤は10a 当たり 140～150L 散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

6 ヒメトビウンカ

- (1) 本種は、イネ縞葉枯病などのウイルス病を媒介するので、これらの病害が発生しているほ場では、本種の防除を行ってください（表7）。
- (2) イネ縞葉枯病の感染時期は、定植から幼穂形成期までのため、6月下旬から7月上旬に本種の防除を行ってください。特に麦畑付近の水田では早い時期から侵入するので、早めの防除を行ってください。

表7 ヒメトビウンカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、 10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	1,000 倍	2 回以内	散布
マラソン乳剤	マラソン	1 B	収穫 7 日前まで	2,000 倍	5 回以内	散布

注1) 乳剤は10a 当たり 140～150L 散布する。

注2) マラソン乳剤は「ウンカ類」での登録。

注3) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農林水産省のホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください。（記載中の登録内容は令和7年6月11日現在）